内藤立候補予定者

皆さん、こんにちは。内藤喜文でございます。私は昭和 34 年に湯河原町で生まれ、その後も湯河原生まれ湯河原育ちでございます。昭和 58 年に湯河原町役場に入庁し、先月でございますけれども、退職したところでございます。今回の立候補表明の要因の一つには、前冨田町長が突然お亡くなりになりまして、町政に混乱をきたしてはいけないというものが一つございます。
そのほかには、湯河原町が消滅可能性自治体ということで名前が挙がりました。湯河原町を持続可能なものにするために、子どもとか中高年、高齢者と区切るのではなく、ご家庭での横のつながり、また会社や学校での縦のつながりに加えて、地域社会の斜めの関係というものを築き、湯河原町が地域でつなぐ斜めの関係を大切にして、町民の皆様がともに生活していける、全ての世代が輝く共生のまちというものを目指したいというふうに考えたものでございます。

テーマ 1
湯河原町の基幹産業は、御案内のとおり観光でございます。
その中で、やはり大きなウエイトを占めてくるのが宿泊者の数になります。と申しますのは、宿泊によりまして地域の仕入れでございますとか、さまざまな外に繰り出す等、さまざまな要因で地域経済の活性化が望めるものになります。湯河原町の宿泊者数につきましては、平成 30 年では約 69 万人で、コロナ禍で激減いたしましたが、直近の数字では約 60 万人まで復活いたしましたが、コロナ前の 85%になっております。そこのところをまずコロナ前には戻さなきゃいけない、そして地域経済を支えなきゃいけないというふうに考えております。そのために、昔、私が運転免許をとれたての頃でございますけれども、なかなか温泉場の方を車で行くのはとても嫌でした。
と申しますのは、やはり浴衣のお客さんがカッポカッポと歩いている状況で、そういう湯河原を見てきましたので、何とかそういうふうに戻したいというふうには考えております。そのため、千歳川沿いの遊歩道をうまく活用して、輪島の朝市までのようにはなかなかもっていけませんが、徐々にそういう形までもっていき、宿泊の方が夜とかチェックイン前とかにその辺を回遊できるような形がとれればなというふうに考えてございます。
また、いろいろな観光財源を支えるという意味で、宿泊税の導入というものを検討したいと思います。今の湯河原町の入湯税については、標準税率を用いておりますので、年間で約 150 円ですか、一人 150 円で、年間で約 8,000 万円になります。仮に同じような数字を宿泊税に持ってきたとしても、年間 8,000 万円の観光財源が生まれます。
また、仮に 300 円にすれば、1 億 6,000 万円の観光財源が生まれてきます。そこで生まれた

観光財源を観光の事業といいますか、施策に充てる中で、今、一般財源で賄ってある観光財源の方を他の事業等に回しまして、町全体の方を活性化できるのではないかというふうに考えます。
また、あと農業についてでございますけれども、やはり今、後継者不足等々、いろいろと騒がれております。なかなか農業というのは木を一本植えても、実がなるまでにやはり 10 年以上かかりますので、すぐに転作等々できるものではありません。そこで、少量でもいいので多品種を何とか流通過程等に乗せるようなことができないか、ということも検討していきたいと考えております。

テーマ 2
先ほど申しましたとおり、湯河原町の消滅可能性自治体ということで名前が入ってしまいました。とてもショックを感じたところでございます。と申しますのは、ここ数年、転入者の方が転出者より多い転入超過という状況は続いておりましたので、そういうことで以前、役所時代は携わっておりましたので、ショックを感じておりました。
ただ、湯河原町の人口はやはり生まれる方よりお亡くなりになる方の方が多いということで、徐々に減少しているのも現状でございます。そこで少子化といいますか、子ども福祉の部分におきましては、何とか学校給食を段階的に無償化したいというふうに考えております。
また、小児医療費につきましても、今 15 歳までででございますけれども、18 歳まで引き上げたいと思います。この 2 つについては、やはり自治体として子どもさんたちの健康であるとか福祉を守るという意味で大切なことではないかというふうに思います。また、現在、中学校給食についての方向性が定まっておりますが、なかなか前に進んでおりません。前に進んでおりませんので、早期に実現することを進めたいというふうに考えております。また、最後に小中学校のあり方というものを、やはり子どもさんが減っているという中で、今も議論はされておりますが、まだ子どもさんの気持ちになった、議論が進んでいないじゃないかなというふうには感じておりました。
子ども目線でそれらの議論を加速していく必要もあるかなと考えております。次に、高齢者になりますけれども、高齢者福祉については、湯河原町も他の自治体同様、かなり色々なものでカバーしているというふうに考えております。ただ、その中でもう少し若者と触れ合う機会をなんとか増やしていきたいというふうには考えております。
と申しますのは、よく高齢者の方が若者と一緒にいると元気になるよ、ということもありますけれども、10 年ぐらい前ですけれども、実際にそういうエビデンスの結果も得ておりますので、今 2 カ所ある多世代の居場所というものがございますので、そこを活用した形で何とか高齢者と子どもさんたちとのふれあいの場を設けたいというのは、今より加速していきたいというふうに考えております。

あと、また、住民が住民を支える福祉、高齢者福祉というものを推進していきたいと思います。これはどういうことかというと、高齢者の方が何らかの資格研修等で資格を得る中で、高齢者自身が高齢者の福祉の介護の一部を担うというようなことができないかというふうに考えています。
それによりまして、当然介護を担っている高齢者自身のやる気とかもありますし、逆に今、ヘルパーさんもかなり不足しておりますので、生活支援の一部をそういう方が担っていただければ、そういうことも解消していけるのではないかというふうに考えております。

テーマ３
公共の施設でございますけれども、地域には 9 つの地域会館がございます。こちらについては、私の現役の時代にほぼほぼ完了いたしましたが、あと残っているのはリノベーションする施設が数施設、また一番大きなものとして文化福祉会館というのがございますけれども、そちらについてはこれからなるべく PPP、PFI みたいな形で執行できればというふうには考えております。
その中で、やはり一番大きなのが役場の庁舎になってまいります。湯河原町、来年で町村合併 70 周年を迎えます。そのときの記念事業といたしましてつくられた一つが役場の庁舎です。60 年ほど経過しているわけですけど、老朽化と耐震化もできないという中で、かなり住民の方にはご不便をおかけしている部分があります。
建てかえと言いましても、当然今の場所でいいのかとか、ほかの複合化しなきゃいけないのかとか、どういう機能を持たせたらいいか等々、いろいろ検討していく材料がございます。
そこで、まず初めに、町民のアンケートをとる中で、建てかえの有無も含めてですね、町民の意向を聞きたいというふうに考えています。
その各種団体であるとか、各地域に説明、意見交換会をする中で、最終的に新しい庁舎のイメージをつくっていきたいと思います。当然、大きな財源が必要になりますので、ここ数年でできる事業ではございませんので、少なくともその中の道筋というものは数年以内につくっていく必要があるというふうに考えてございます。
以上です。

最終ＰＲ
私が本日皆様にお伝えしたいことは、まず一つだけでございます。おひとりお一人がご家族を大切にして、隣組を大切にし、地域を大切にする中で多くのコミュニティーをつくり、世代を超えていろいろなものに参画するまちをつくっていただきたいと思っていることでございます。
つまり、皆様おひとりお一人がまちづくりになります。よく町民の声を聞いてまちづくりに

反映という言葉をしますけれども、まちをつくるのは町民の皆様だと思っております。行政の方は、皆様のまちづくりの障壁となっていることを施策や事業として、ときにはその壁を取り除き、ときには壁を低くするのが役割だと思います。例えば、温泉場にお住まいの高齢者の方が、吉浜のお友達に会いたいというときも、そこに行く足がないよとなったときには、何か利便性のよい公共交通はないものか、であるとか、やはり子育てで家計が苦しいご家庭については何か支援をできるのではないかとか、地域の経済をもっと活性化してほしいという中で、観光商工を中心にもっと力を入れていかなきゃいけないのではないかとか、農業の後継者問題とかも同じように何か解決法とかを考えていくべきだと思います。それらがやはり行政の責務、役割だというふうに考えます。また、あわせて、それらの事業を進めるに当たりましては、財源というものが必要になります。やはり行政としては、そのような財源も含めた確保も行政の責務だというふうに考えてございます。
まずそこで皆さんとともに、ここで私の掲げています全ての世代が輝く共生のまちというものをそういう言葉を出したというのは、それらをひっくるめた中で一緒に共生できるような湯河原町にしたいというふうに考えているものでございます。私からは以上になりますけれども、この場を用意していただきました小田原青年会議所の皆様にお礼を申すとともにご視聴いただいております皆様にお礼を申し上げます。
どうもありがとうございました。